

## 大伴家持研究 表現手法と歌巻編纂

著者	朝比奈 英夫
発行年	2017
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102乙第2816号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00147649">http://hdl.handle.net/2241/00147649</a>

氏 名	朝比奈 英夫
学 位 の 種 類	博士（ 文学 ）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2816 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	大伴家持研究―表現手法と歌巻編纂―

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	谷 口 孝 介
副 査	筑波大学 教 授	博士（人文科学）	清 登 典 子
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	小 松 建 男
副 査	筑波大学 准教授	博士（文学）	本 井 牧 子
副 査	明治大学 教 授	博士（文学）	山 崎 健 司

## 論 文 の 要 旨

本論文は、大伴家持を研究対象とし、万葉集に採録されている家持作品について、表現手法と万葉集編纂の両側面から考察を加え、家持の文学的営為の意義を解明することを目的としている。その目的を遂行するために、歌群の形成、漢籍の受容、歌巻編纂の三つの視点を設定し、「第一部 歌群の形成と漢籍の受容」では、歌の連作的集合によって一つの作品を構築する手法を究明し、かつ個々の表現に認められる漢語の影響関係を厳密に押さえつつ、家持が詠むべき対象をいかに把握し表現したかを明らかにしている。この視点は「第二部 歌巻編纂と万葉集の成立」に深く関与する。家持による歌巻編纂については、万葉集末尾の巻十七から巻二十を考察対象としている。この四巻は、家持の動静を中心として作品を日付順に配列する「歌日記」の形態を取り、その編纂に家持が深く関わっていることは周知のことである。この四巻のうちとくに巻十九の成立を解明することを端緒として、万葉集の最終的な成立の問題にも考察を及ぼしている。本論文の構成は以下の通りである。

### 序章

#### 第一部 歌群の形成と漢籍の受容

第一章 家持と坂上大嬢の相聞歌群  
第三章 天平感宝元年のほととぎす詠  
第五章 宴における詠物歌

第二章 総題を掲げる独詠歌群  
第四章 広縄を歓迎する宴歌  
第六章 天平勝宝七歳八月の肆宴歌二首

#### 第二部 歌巻編纂と万葉集の成立

第一章 職名表記から見た万葉集編纂  
第三章 表記の形態と歌巻編纂

第二章 万葉集巻十九の成立と職名記録  
第四章 万葉集の成立と大伴家持

### 終章

第一部第一章では、天平 11 (739) 年の家持と大伴坂上大嬢との相聞歌群 (四・727～755) を取りあげ、これが家持の初期における歌群形成の一つの典型であることを論じている。第二章では、家持の歌群形成の手法が成熟した形で表れている、天平勝宝 2 (750) 年 3 月の長歌を含む作品 (十九・4159～4165) を取りあげる。これらが山上憶良を意識しつつ相互に内的関連性を持ち、総体として一個の作品としてまとめられていることを指摘する。第三章では、天平感宝元 (749) 年 5 月に詠まれたほととぎす詠 (十八・4089～4092) を取りあげる。この四首の長反歌は、家持の高揚した官人意識によって詠じられた歌群の冒頭に位置する。この四首には儀礼的性格と官人意識を底流させつつ孤独を詠じる姿勢とが緊密に結ばれていることを論じる。第四章では、前章の翌月閏 5 月 27 日の日付を持つ長反歌三首 (十八・4116～4118) を取りあげる。この歌群は家持の配下、越中掾久米広縄が朝集使の任を終えて帰任したおりの歓迎宴における作品である。前章に引き続き官人意識の高揚のうちにも親愛の情も組み合わせる長歌を構成する技法が見出されるという。第五章では、家持が越中国守から少納言に遷任後在京初の天平勝宝 3 (751) 年 10 月の宴歌 (十九・4257～4259) を取りあげる。左注の文言を手掛かりにして、家持歌が、中国の詠物詩に学んだ手法によって矚目の景物を通して晩秋の季節感を織り込みつつ、時代の移り変わりに対する感慨を繊細な感覚で詠じられているとする。第六章では、天平勝宝 7 (755) 歳の二首の肆宴歌 (二十・4452～4453) を取りあげる。漢語「花 (華) 庭」の含意する賛美性を巧みに翻読して詠歌に取りこみ、清らかで美的な情景のなかに賛美される肆宴の様相をみごとに詠じる、家持の円熟した表現手法が指摘される。

次いで第二部第一章は、巻十八、十九に見える越中国司について、職名の表記法に注目して巻十九の編纂過程の一端を明らかにしている。巻十八、十九には、職員令に定める国司の職名表記「守、介、掾、目」と、それとは系統を異にする職名表記「長官、次官、判官、主典」とが混在する現象を指摘する。後者の系統が巻十八の巻末部 (4137 題詞) から巻十九の前半部 (4207 題詞) までにわたり意図的に使用されていることを明らかにし、国司の職名表記の使い分けが巻十九の編纂過程の解明につながる現象であることを論証している。このことから天平勝宝 2 (751) 年正月から 4 月までの作品 (十八・4136～十九・4210) が首尾整った体裁にまとめられていたこと、その一歌群は、晩春から初夏の花鳥詠作が連続し、後に巻十九が編纂されるにあたって、重要な役割を果たしたと推定された。第二章では、巻十九、二十に記される職名表記の様態から、巻十九の編纂過程を考察する。ここでは第一部第五章で取りあげた紀飯麻呂宅での宴歌 (十九・4257～4259) の記録において、参集者のうち紀飯麻呂の官職「左大弁」、中臣清麻呂の官職「左中弁」が宴当時のものと異なっていることが指摘されている。この問題を巻十九の形成に連なる現象と捉え、当面の宴歌以降に見える官職記録や、題詞、左注の様態まで調査し、家持による歌巻の形成過程を解明し、巻十九の編纂が行われたのは、天平勝宝 9 (757) 歳 8 月 5 日～天平宝字 3 (759) 年 7 月 3 日の間であると推定がなされる。第三章では、巻十九の編纂過程と歌の表記の様態とを関連づけて検証する。巻十七、十八、二十の三巻が表音表記を主体としているのに対して、巻十九のみは表意表記を主体としている。そこから複数時の編纂段階それぞれの表記の姿が、現在見られる表記の様相に反映していることを検証している。表記の様態から得られた見通しと第二部第一章、第二章で得られた巻十九の編纂過程に関する結論とが方向を一にすることが示された。第四章では、前章までの論述を承けて、万葉集二十巻の成立事情と大伴家持との関係を取りあげる。歌作から遠ざかった家持晩年の三十年に及ぶ経歴とそれを取り巻く歴史状況とに注目しつつ、家持が万葉集の成立に果たした役割を考察し、第二部をまとめている。

終章では、歌群形成の手法と漢籍の受容とが独自の作品世界を生み出し、歌群を形成する手法が万葉集末四巻の編纂を促し、延いては二十巻の成立を導くこととなった見通しを述べて全体を結ぶ。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

本論文は、大伴家持の作歌のなかでもとくに万葉集末四巻に焦点をしばり、漢語の翻読語による作歌から歌群形成による作品形成の方法、さらには末四巻の歌巻形成へと、作品の細部へのまなざしから万葉集成立という巨視的な問題系へとダイナミックに論を展開している。万葉集のすみずみにまで目配りができていて初めて可能な所為であり、この点にまず論者の力量が看取されるところである。

本論文の成果として次の三点を挙げることができる。一点は万葉歌を解釈するにあたり、漢語の用例に目配りしつつ漢語との往還運動のなかで歌の理解を深めることに成功していることである。このような和漢比較文学的方法は近年盛んになりつつはあるものの、多くは類似表現の指摘にとどまり、歌の表現性の探究にまで論及しえていない。しかしながら本論文においては中国側の用例においてもできうかぎりていねいに文脈を押さえつつ語の含意性を明らかにしたうえで、万葉集の表現との異同の検討を行っている。このようにして初めて万葉集歌の表現の特異性も際立つものと言えよう。

二点目は家持歌における歌群形成の方法の解明を進めたことである。万葉集における歌群の研究は幾多の論が積み重ねられてきた分野である。そこに新たな視点を導入することは至難ではあるが、本論文ではていねいな歌の読解に基づき、如上の漢語使用の方法を絡ませて歌群の意味を問うという新たな視点をみごとに導入しえている。

三点目としては、歌群形成の方法を核として歌巻形成の解明へと議論を発展させた発想の有効性である。これは本論文の白眉とも言える論点である。そのさい官人の職名表記の分布に着目して巻の形成・成立へと迫る論法には目を見張るものがある。大きな問題に立ち向かうにさいしても一首一首の歌の着実な解釈に基づいていることが、論を確実なものとしている。集の成立というややもすれば即物的でありかつ観念的に傾斜しがちな議論を、表現に飽くまでこだわって論じることで、文学研究としてのあるべき姿勢を示しえたと言えよう。

かくまでに大きな課題に立ち向かう論考であるだけに、残された問題がないわけではない。本論文で取りあげられた歌だけで、立ち向かう問題系をじゅうぶんに解明しうるものであるかはやや疑問で、さらに広く従来の議論を包含しつつ論述を重ねる必要があるだろう。しかしながらそれは本論文の価値をいささかも損なうものではない。本論文が、大伴家持歌ならびに万葉集に関する多くの独創的な見解を提示することで、学界の発展に寄与することは間違いなく、その意義は高く評価することができる。

### 2 最終試験

平成 29 年 1 月 25 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。